

校 友 會 誌

第 四 十 五 號

昭 和 十 一 年 二 月 十 一 日 發 行

滋 賀 縣 立 彥 根 中 學 校

校友會誌

第四十五號

校友會誌
第四十五號
中華民國二十九年
五月十五日

奉 祝

天津日嗣の皇子あれまして日本の本の蒼生タミクサかつ慶びかつ壽ぎまつ
るうちにこたびまた第二の神の皇子ミコの生れアまじつ千代田の森の
都しみ、に竹の園生の彌榮えます慶賀ヨロコビを何にか譬へんげにや神
ながらの道永久トバに盡きず大和島根かきはに動かぬしるしにこそ
ご朝日の豊榮のぼりにた、へ奉るになん

校 訓

本校生徒ハ 聖旨ヲ奉體シ 敬神崇祖
質實剛健 勤勉力行 和衷一心 以テ
至誠奉公ノ國士タルベシ

校歌

一、湖べの春にかざられて
雲ふきはらふ膽吹山
ふもとの若葉あたらしく
われらが園はかがやけり
二、緑しづけき學びやに
智徳のとほそ啓きつゝ
明けはなれゆく人の世の
われらが窓に光あり
三、不撓の決意と力行の
わかき生命にまもられて
幸とほまれに美はしく
われらが園はかがやけり

四、剛健自助の門によりて
湖畔のまもり嚴かに
たてる金龜の學びやの
あほほまれある幾春秋
五、金剛不壞のこゝろもて
つとめ勤しむ森のかけ
われらが窓の燦爛と
あほほまれある幾春秋
六、天のかがやき地に享けて
こゝろ澄みたる琵琶の湖
金龜の春ととこしへに
われらが園は新たなり

—澤村專太郎氏作—

校友會誌

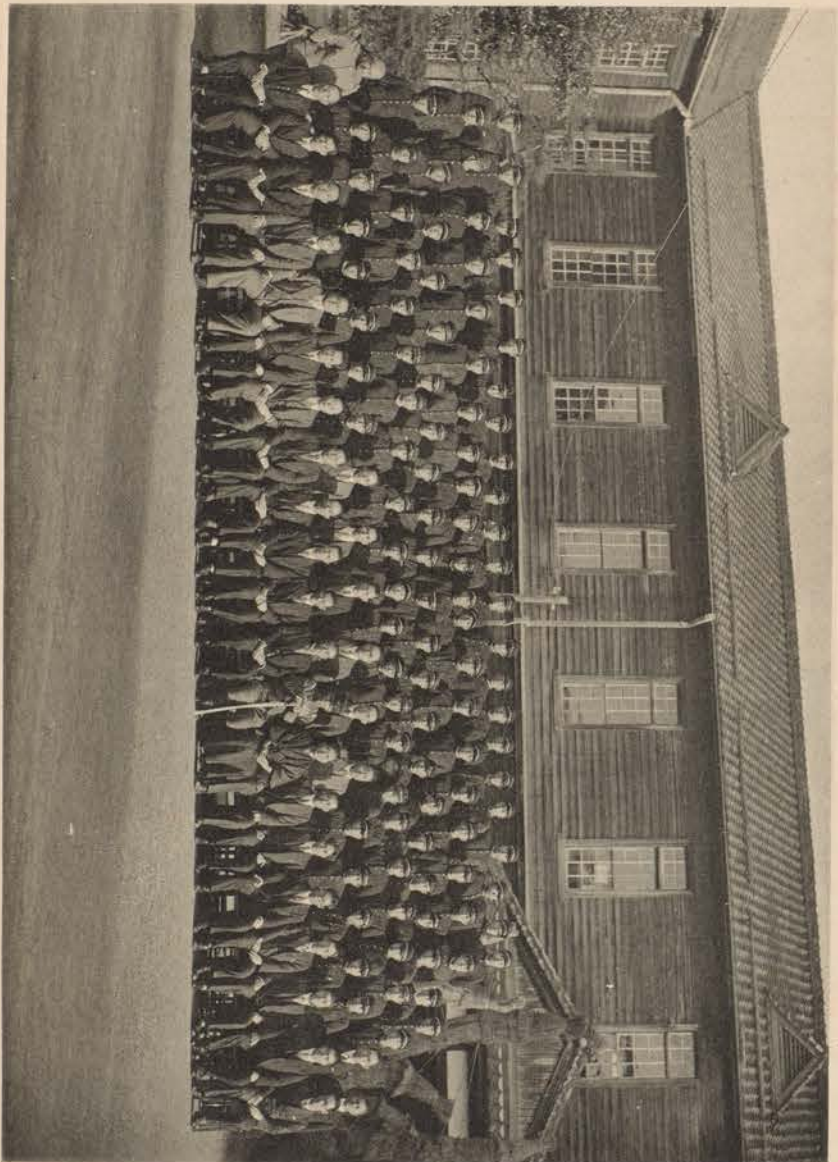
(第四十五號)

目次

奉 祝	校 調	校 歌	校 繪	口 繪	語 錄	研 究	文 苑
第四十八回卒業生	優勝せる競技部選手	優勝せる野球部選手	學生の競技選擇に就いて	再び來ぬ中學時代	やもりの外部形態に就て	長曾根邊の生物	山 路
學校長 足立先生	客員 丸茂先生	客員 尾田先生	五年 竹林	三年 狩野	五年 竹林	五年 狩野	五年 竹林
一頁	二頁	五頁	博 九頁	武 二頁	五年 竹林	五年 狩野	五年 竹林
秀夫 二頁	安藤 權一 四頁	光友 正 一六頁	林 榮一 一七頁	林 義夫 一八頁	大橋 文吉 一九頁	鳴呼 大楠 公	秋に 想ふ
受驗場の雰圍氣	自ら生きる草	さらば友よ					

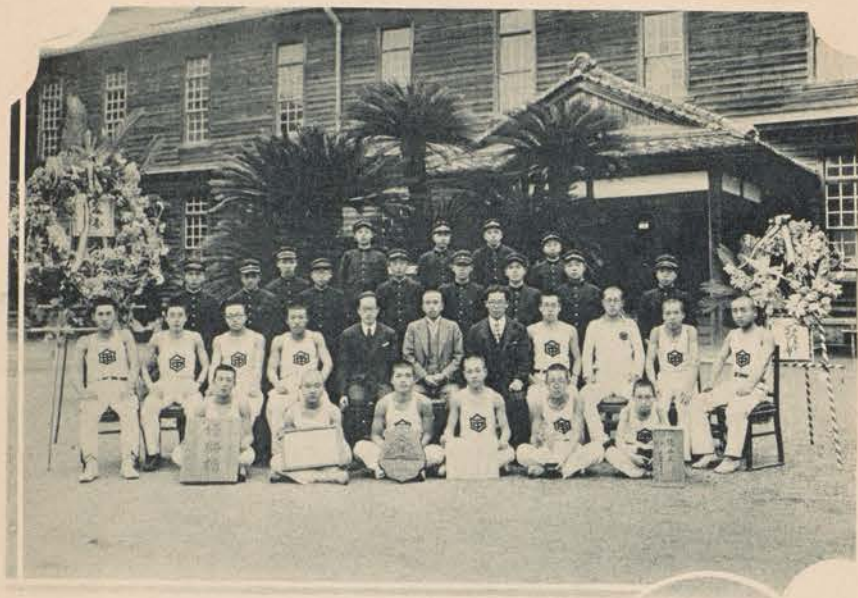
田園を讚美する	五年	中堀正男	三頁
偶感	四年	中村音次郎	三頁
修學旅行隨筆	四年	奥居重勝	三頁
立秋	四年	谷澤英夫	三頁
ごくだみの花	四年	西山雅彌	三頁
街頭所見	四年	青山正彦	三頁
秋の微笑	四年	野瀬茂	三頁
秋の感傷	四年	藤邊行靜	三頁
音樂	四年	大菅繁三	三頁
決斷	四年	上村文吉	三頁
月	四年	嶋本光高	三頁
風	四年	馬場國夫	三頁
湖畔道遙	四年	望月實	三頁
音樂	四年	堤月靈	三頁
艱難に對する戰鬪力	四年	松林時雄	三頁
信念に生きる	四年	美園起有	三頁
夏の朝	四年	森田泰造	三頁
力の演邊	四年	越田武知	三頁
貴の演邊	四年	堀勸三	三頁
校訓	三年	馬場兼吉	三頁
現代青年の意氣	三年	松本顯美	三頁
我が崇拜する人物	三年	北村忠夫	三頁
我等の使命と覺悟	三年	村井博一	三頁
伸びよ一輝け躍進日本	三年	丸野房松	三頁

我が崇拜する人物	二年	中川敬一郎	三頁
文明と人の勞苦	二年	大橋壽真雄	三頁
喜	二年	西關藤一	三頁
盛夏スケッチ	二年	朝見伸夫	三頁
夏休の感想	二年	山川繁	三頁
阿寒スケッチ	二年	中川禮三	三頁
浪	二年	木村昌太	三頁
神戸へ旅して	二年	西山子得	三頁
清水寺を訪ふ	二年	川合一夫	三頁
兄を送る	二年	宇野信三	三頁
机に凭れて	二年	島倉昌一	三頁
夏の濱のスケッチ	二年	高田善之助	三頁
ラサ	二年	大森圭造	三頁
山	二年	山川清孝	三頁
御來迎	二年	満島俊次	三頁
歳末の頃	二年	佃精一	三頁
校門	二年	細川常雄	三頁
彦中生活片々	二年	一谷道雄	三頁
運命	二年	淺島浩二	三頁
江の島巡り	二年	横田不二夫	三頁
賤ヶ嶽に立ちて	二年	寶意敬造	三頁
伊吹山登山記	二年	中野修吾	三頁
街の紙芝居	二年	北澤信孝	三頁
寫生	二年	小田博三	三頁



朝・月の満ちた夜……………	一年	保	六頁
愉快だった一日……………	一年	松	一〇〇頁
小田原にて……………	一年	田	一〇七頁
水島……………	一年	敏	一〇八頁
伊吹……………	一年	保	一〇九頁
朝出……………	一年	一	一一〇頁
濱の朝……………	一年	夫	一一一頁
秋の雨の夜……………	一年	夫	一一二頁
或夜の使ひ……………	一年	夫	一一三頁
昆蟲採集日……………	一年	夫	一一四頁
水泳……………	一年	夫	一一五頁
横須賀港見學記……………	一年	夫	一一六頁
名古屋城を觀る……………	一年	夫	一一七頁
石山と三井寺……………	一年	夫	一一八頁
夏の旅……………	一年	夫	一一九頁
(詩)			
(自由律短歌)……………			六頁
(和歌)……………			一〇〇頁
(俳句)……………			一〇七頁
【特輯】郷土モクシヨウ……………			一〇七頁
修學旅行記……………	雜	誌	二二頁
部報……………	四	部	二二頁
(武道部、端艇部、野球部、庭球部、競技部、水泳部)			年一四頁
(雜錄)……………			一六頁
○校友會役員……………			一九八頁
○學校日誌抄……………			一九九頁
○校友會々計……………			二〇二頁
編輯後記……………			二〇三頁

愉快だった一日…………… 一年 保 六頁
 小田原にて…………… 一年 松 一〇〇頁
 水島…………… 一年 田 一〇七頁
 伊吹…………… 一年 敏 一〇八頁
 朝出…………… 一年 保 一〇九頁
 濱の朝…………… 一年 一 一一〇頁
 秋の雨の夜…………… 一年 夫 一一一頁
 或夜の使ひ…………… 一年 夫 一一二頁
 昆蟲採集日…………… 一年 夫 一一三頁
 水泳…………… 一年 夫 一一四頁
 横須賀港見學記…………… 一年 夫 一一五頁
 名古屋城を觀る…………… 一年 夫 一一六頁
 石山と三井寺…………… 一年 夫 一一七頁
 夏の旅…………… 一年 夫 一一八頁
 吉居恒雄…………… 一年 夫 一六頁
 島津清彦…………… 一年 夫 一九八頁
 金子治彦…………… 一年 夫 一九九頁
 小堀滋彦…………… 一年 夫 二〇二頁
 野村實藏…………… 一年 夫 二〇三頁
 江龍貞信…………… 一年 夫 二〇四頁
 松田實藏…………… 一年 夫 二〇五頁
 西島實藏…………… 一年 夫 二〇六頁
 大照完次…………… 一年 夫 二〇七頁
 西田洋次…………… 一年 夫 二〇八頁
 樋口芳郎…………… 一年 夫 二〇九頁
 西川知一…………… 一年 夫 二一〇頁
 坂田保夫…………… 一年 夫 二一一頁
 柏島敏保…………… 一年 夫 二一二頁
 松田敏男…………… 一年 夫 二一三頁
 松田又一…………… 一年 夫 二一四頁
 保田義亮…………… 一年 夫 二一五頁



語 錄

學校長 足立芳之助

◇ 之を外に求むる勿れ。常に内を見よ。内部の世界を見よ。自己心内の世界を見よ。然らば凡ては立所に解決せん。我等の爲し得ることは、我等の爲さねばならぬことは、我等が自己の力によりて眞に爲し得る凡ては、自己を深めることである。ただそれ自己を深化することである。自己は無限に深め得るもの。

◇ 自分一人くらは何うなつてもよい、と思ふのは間違つてゐる。自分を措いて我が家はない。自分を措いて我が彦中はない。自分を措いて我が國家はない。自分が凡てである。

◇ 一生涯といへば長いやうであるが、現實には今日の一日しかないのである。更らに嚴密にいへば、今の一瞬しかないのである。一生涯を有意義に生きる工夫は、だから、今日の一日を、嚴密には今の一瞬を有意義に生きる工夫にある。今日の一日、今の一瞬のありがたさを、つくづく想ふ。

◇ ある程度までは誰でも出来る。一步案に擡んづるの工夫が肝要。而して之には、絶大の努力を要する。凡人と非凡人との岐れ目は、實にこの工夫、この努力の如何にある。

うれしさは

あだち

うれしさは――

元氣あふれて力あり

希望に燃えて輝ける

にこにこの顔ともどもに

楽しく學ぶ教へ子の

熱と誠の権化とも

淨くたふとき

すがた見るとき

校友會誌 第四十五號

論 說

學生の競技選擇に就いて

――猛きアスリート彦中學徒へ――

(客員) 丸 茂 義 光

(体育の本質を最も簡単に説明すれば即ち合理的に心身天賦の力を保護増進するところの人為的作業である、人為的作業とは即ち君等各自が自己の体力を鍛へる運動そのものである。人間は生れながらにして強弱に多少の差はあれどもほほ一定せる体格を持つてゐるものである。がしかしそれは丁度諸君の顔が萬人異なる如く、体質、体型も皆異なるものである、此点から考へた時吾々は自己の最も体質に合致せる運動を選択し之に依つて体力を増進せしむる必要がある、然らざる時は害こそあれ決して鍛錬にはならないものである、此の点を考慮し自己の体質、体型より割り出されたるスポーツに依つての練習は必らずしも君等各自の体力増進に本校体育を最も合理的に向上進歩させる事が出来るのである。)

スポーツは文明。文明と氣候。氣候とスポーツ。恠うした關係は現代の社會狀態から見て到底隔離することの出來得ない事實である。

見給へ!! 古代に至る世界文明の流れを。
斯く考へた時吾々は今後五十年の後に於て世界文化の中心となるべき地点は、何處であらふか云ふことを考へた時自分は

必らず我大日本であるを豫言し得るこゝが出来るのである。此の事に就いての既に諸君に話した事があると思ふので省く。矢張り悠うした文明の流れと、スポーツの流れとを考へた時、遠きあのギリシヤの自然と、悲壯にして、且つ神秘的なデスカス(圓盤)の傳説とを想ひ浮べずには居られない。同時に吾々が何處までも偉大なる自然力の爲に、常に刺戟づけられつゝあると云ふことも感ぜられるのである。

殊に此の秋の良きシーズンに於ては一層心の跳進から、表現美への勇往邁進を感ぜずにはおかれなくなつてくる。

此の古城の一角に聳ゆる校舎の窓に立つた時、又あの緑のグラウンドに立つた時、清き春風の流れば唯く吾々青年に、走れ!!跳べ!!と囁くのであらう。

青年の理想は向上である。

走れ! 跳べ!

地を蹴つて跳び行け海の彼方まで……

活動は青年のみの享樂し得る特權である。

x x x x x

而して君等は先づ、自己の体質、体型を考へて後、スポーツに親しまねばならぬ。漫然と競技種目を採用しても、己が身体に適合せるものにあらざれば、到底優秀なる体力を存することも、優秀なる技能を表現せしめることも不可能である。

吾等は、生れながらにして天與の能力を存するものである。これをして理論的に、實際的に活用せしめたならば、立派なジャンパー(Jumper)(跳躍者)となりスプリンター(Sprinter)(全力疾走者)となり、スローワー(Thrower)(投擲者)となり得るものである。君等は此の天與の賜をして、最も有効に活用せしむる時に、其處に青年の力が無限に開展して來るのである。

青年は強者であらねばならぬ、体力に於ても智力に於ても、活動力に於ても強者であらねばならぬ。競技は青年の花であり生命である。青年の向上も、強き奮闘で、純真なる血潮に依つて育成され、グラウンドに於て達成されるのである。故に、若し君等が此のスポーツを通じて、強者とならんと欲するならば、次の方法に依りて種目を選び給へ。

(一) 君がスピードあり、身体頑健なるにもせ彈性力(跳躍力)を失つてゐるならば四百米を試みよ。特に中柄より以上になり高き時は更に有利である。普通の四百米ランナーは、中柄以上の者であるからである。長大なる脚部と、強き心と強き肺とを有する者は、此の競技の最高要素である。

(二) 君がスプリント(全力疾走)強く、スプリング(跳躍力)ありて、他のスプリンター(全力疾走者)を破ることが出来るならば、君はハードルを試みよ。脚部が強く、且つ長大なる時に於ては尙更よい者である。かゝる人は、スプリンターとなるよりも、ハードラーとしてのチャンスを有してゐるものである。

(三) 君が若し、普通の速さを有し、終始一貫せる、ストライドを保持する者であり、且つ身体の頑健なるものであれば、中距離及長距離を試みよ。これ君をして、八百米ランナー(走者)として成功爲さしむるものである。

長距離ランナーは生るゝにあらすして、つくられるものである。勿論天性其素質を有してゐる者もある。彼は生れながらにして、精力、持久力、心、肺等の如き力を有してゐる。彼が努力と練習とを失つたならば、駄馬の如く活力を失ふものである。若し此のランナーとならんとせば一年中走つてゐなければならぬ。絶えざる努力と、意志力とは、君に良きコンディションを與へるので、君は斷乎たる決意と、勇猛心とをもつて走らねばならぬ。實に此のレースは努力である。

(四) 君の脚に彈力あらば、君は高跳を試よ。高跳に於ては、彈力ある筋が第一の要件である。

(米國選手、リチャードは、一九一二年に、ストックホルムで開催された、オリムピック、ゲームスに於て、其の豫選の時彼は固有の彈性を利用してフォームなくして、六呎を跳んで觀衆を驚かせたのであつた。其後名コーチャーたる、マールキー氏の指導に依つて、オリムピック、チャンピオンに鍛へ上げられたのである。彼が若し、固有のスピリングを欠いてゐたならば、チャンパーとしての望は斷然無かつたのである)

(五) 君が若し、スプリントありて、スプリンター(全力走者)の榮譽を得る能はずして、スプリング(跳躍力)ありて、ハードラーたる一流選手に入る事が出来ぬとせば、君はブロードジャンプ(走巾跳)を試みよ。此れスピードと、スプリントとが其の要素であるからである。

(六) 君が若し臂、肩とが強く、スプリングありて中柄か、或は少し高き時は、棒高跳を試みよ。体重あるものは重過て

適せぬが、相當なる者は優勝するまでに達することが出来る。此の競技は技巧的で、神経系統の鋭感なるものが最もよい。

(七) 君が臂長く体高く、体重あれば圓盤投を試みよ。肩と臂との筋肉の強大なる時はよりよきチャンスを與へるものである。

(八) 君が体重あり、筋力の強き時は、スローイング(投擲)のすべてに適するものである。殊に体重あり、身長高く、筋力の無限に強大なる時、且身体頑健なればハンマースローとして最も適した者である。

(九) 君に体重あり、且臂の力とスプリングとがあつたならば君は槍投を試みよ。君が更にスピードがあれば此の競技に最も有効なるチャンスを與へるものである。

(一〇) 君が体重ありて、身体小なる時は砲丸投を試みよ。身長の高きは最もよいのであるが、小なるとてもよきレコードをつくるこゝが出来ぬ。

(一一) 君が中柄にして、鋭敏性を有し、スプリント(全速力)ミスピード(速力、ハヤサ)を有すせば、君はすべての競技に適す、殊にジャンプと棒高跳は最もよく、スローイングには、あまり適しないはゆる十種競技のタイプである。

注意
1 重技運動即ち投擲に適する体型は、軀幹及び四肢の筋肉の隆々させるものにしてヘラクレス型といふ。ヘラクレスはツイイスの子にしてギリシヤ人の民族的表现である。

2 軽技運動即ち跳躍技に訓練されたる身体は筋肉が繊細的に、且つ美的調和的に發育せるものにして、此の筋の絶對力は少しと雖も、敏捷に活動し得る能力を有してゐるこれをヘルメス型といふ。ツイイスの神の子にして、力と美とを與ふる体育の神と稱せられてゐる。

結論

青年よ! 學徒よ!

自己の體質、体型から割り出された競技運動そのものを、自己の努力に依りて、心ゆくまで スポーツの特權を獲得せよ。人間生活に於ける身体の輕き疲労は實に欠くべからざるものである。疲労なき生活は進歩なき生活にして、眞に暗然たるも

のである。吾等に慰安を與ふべき安らかな休息は、聽て肉体的機能を十分に回復し、次に來るべき活動へのよりよき源動力とを與へるものである。

氣宇潤達! 純真なる行動は、強健なる身体機の表現である。其の暈の光、紅の頬は、此れ血に生ける青年學徒の唯一の特長である。大地に芽生して大地に生くる魂の躍動は、青年として且つは人生として唯一の楽しみである。

青春なる吐期をして有効に活動し尊き道を辿らんと欲せば、此のスポーツに依るより他はない。聽て來るべき業務に對しての強き活動となり、社會的生存の意義が認められ、正義を愛好する信念が、君等青年學徒に更により深く強められるのもこの體育競技による。

斯くしてこそ、人生行路を辿る強き信念となり、社會と個人との調和 家庭に於ける團樂の生活ともなるものである。

個人的偏狹より脱して、公明正大なる心を養成し、男子として、青年として明きる道を進む程嬉しいものはない。此處に於てこそ、フェアプレーの精神が其の健康の、肉体よりおぶれくるを知つた時、君は言ひ知れぬ嬉しさに満されることであらふ。

而して、心身の鍛練をなすと共に、一中健兒の意氣を表現し、心ゆくまで、彦中スポーツの殿堂を建設せよ。

再び來ぬ中學時代

(客員) 尾田鶴治郎

中學時代は一生の準備時代。これを樹木に譬へたら根を張る時代である。幹を太らし、枝を伸ばし、葉を茂らし、花を咲かし、實を結ぶ時代ではない。その枝葉を伸ばし花を咲かす原動力の根を張る時代である。根を張る營みは目に見えぬ地下の營みでは

あるが、土を凌ぎ石を割つて無数の細い根、太い根を張る大地に抱きつく烈しい生の營みである。他日外的社會的に樹頭の花を榮えるためにぎんなに大切であるかを考へなくてはならぬ。根の浅いものに、根の平凡なものに強い生活は保障されない。大なる成功は求められない。中學時代は世間も餘り問題にせず、仕事も餘り見榮えがせず、自分自身も亦若氣の油断からとかく浮はつて迂濶に過し易い時期であるが、人間の一生はこゝで岐れる。だから眞劍に努力せなければならぬ。一層奮發し充實せなければならぬ、人生行路の力の過程である。

人生は五十年、長くとも百年とは行かぬ。又人間の力には限りがある。所詮一升のマスには一升しか入らないのが共通の運命である。が、これは形の上である。量の問題である。その一升マスに何を入れるかが人間自由意思の問題である。米を入れるか砂を入れるか、水を盛つても一升、油を量つても一升、金を入れても一升。生涯の運命はこの一升マスに砂を盛るか黄金を充たすかにかゝる。中學時代の意義はこの一生のくらし方を心構へし、その根源素地を培ひ造る極めて大切な時である。而もこの時期はさう長くはない。そして再びは來ない。

大人になつて多くの人はこの時代に遊んだこと、この時代に迂濶だつたことを悔いてゐる。『青春人にして幾許ぞ、思へば惜しき過去なりき。』と嘆じた哲人もある。中學時代の無自覺が人間終生の悔となることは多くの人に於て共通である。而も當の中學時代には、野心に燃え成功を夢みながら、この準備時代、粒々辛苦一生の生活の根を張る基礎工作時代の日々の眞劍な苦闘の必要を見落し勝ちである。

自覺といふことは生涯の仕事の上に金剛心を植付ける謂である。其の日其の日の仕事の上にも生涯の自己の上にも自覺のある人と無自覺の人とは格段の差を生じる。能率の上に、實質の上に、一寸した仕事、僅少な自分の時間でもこれに對する心構へが全く異つてしまふ。目前や世間體やごまかしや利慾や僥倖に囚はれず、眞實のあるべき自己に住して一生の根を張る努力を續ける。努力を努力せなければならぬ。

中學校に合格した時の喜びは諸君の終生に忘れ難きよろこびの一である。更に之を専門學校に合格發表された時の歡びに延長せなければならぬ。現在に於て上級學校への入學は相當の難關ではある。その合不合格の人生にとつての意義も深刻である。それだけ不安も多くともすれば縮み易いが、又それだけに意義もあり、愉快でもある。而してこれが如何を決するものは平素の自覺による。中學時代の意義の決定と之に處する眞劍な準備は益々必要となる。

ベストを盡すといつても、方法を得ねば駄目だ。蒲鋒の如く遮二無二机に嚙りついてノートしても無駄だ。自然の秩序により、よく考へをめぐらし、確實完全なる記憶として頭に入れねばならぬ。量より質であり、漫然たるより自覺あるによる。嘗て故大町桂月は『冀勉強もせねよりはました。』といつた。頭がよいといつて努力勤勉を缺くものより確かにその眞劍さの勝利を認める。慢心自負の徒は寧ろ心の自覺に於ける劣者である。運動家型があり努力家型があり、文科型、理科型。頭脳型技能型と幾分の個性差はある。而し準備はごまかでも準備である。努力家は最後の勝利者であることを忘れてはならぬ。たゞ方法を得た。内容的に的確な努力でありたい。膺物は剥ける。精實は至心を傷ける。これからの世界を想ふとき、諸君が現下の努力は更に眞劍を加へねばならぬと思ふ。特に目的がシツカリしてゐるものほど努力が眞劍になる。目的は指揮官であり、生活に統一をつけるものである。

日本精神乃至校訓にある『至誠奉公の國士』の有する意味は日本國民の生活を現實に統一してゐる至大な傳統的精神であり、この精神に純一を參し、その意味を確把して動じない修養は中學時代のより根本的な心性の根の啓培であり、最も必要にして當然なる生活準備である。個人は國家をぬきにして考へられぬ限り、個人の個的な生活目的は當然にこの大目的共同目的に生活的に歸一せられるべきもので、國家的にいへば、諸君の日々の勤勉努力は至誠奉公の國士の實態たるべき人間の訓練であつて、同時にこの義務の甘受の下に人間の最大幸福が存する所以である。この意味を漠然とでなく抽象的にでなく、心魂に打成結晶することが現在の諸君の心生活の上に實際生活の上に大切である。中學時代には本來的に天真純一、得喪のために心を勞せず、形骸のために思ひを悩まぬ時代ではあるが、ともすれば淺薄な個體的觀に流れ、思想的に動搖左右し易い危険線上にあるものであるから、目的を立つる上にも、仕事をする上にも特にこの精魂を樹立して置かねばならぬ。今日は日本國力の劃期的な伸長擴大期に面してゐる。世界は日本を中心として起伏し波動してゐる。日本は日本の使命の最も重大な時に際會してゐる。王事に盡す至誠の意義のこの時はさ重大なことはない。日本乃至日本國民の生活の幸福否とは實に此の機にかゝるとさへ思はせる時である。

如何に生くべきか、の問題は日本人にとつては如何によりよく死すべきかの問題である。『よき死にを致す。』この意味が日本精神である。『士養ふこと三年、一日の用に供す。』その一日の用にさゝげる一身が日本國民の生活である。日々夜々の修養

勤勉のことごとくすべてが即ち國家に御奉公の意義を生む。軍人、政治家、教育家、思想家、文藝家、實業家、農業家その職業層位の如何に拘はらずその國民的意義に於て、その有國家生活者のそれに於て一日の怠慢を許さぬのである。國家に科學知の必要なることは、國家に富の必要なることは、國家に高き精神文化の必要なることは、今日の英伊エ問題に於て、東亞の風雲に於て十分に知悉首肯せられる國民が今日の苦闘躍進はこの一事にかゝつてゐる。況して世界の平和と人類の幸福のため遠大なる使命を有する日本に於ては一層各分野に於ける個人の十全を要望されてゐるのである。

諸君の現在の學業や心魂や之を充實し、純化することは諸君の力は國家の力、國家の隆昌は個人の本性の發展を具現するに他ならぬ、重要な位置と時代にあるが故である。餘計な仕事、餘計な學問、餘計な考へをする暇はない筈である。根源を培ふ中學時代、前途に生きる中學時代、再び來ぬ中學時代であるから。

然し、謂ふところは日々をセカセカと落着かず「忙しい」で暮せよの意味ではない。勉強も運動も、心の修養も休養、有意義にこの意味の自覺に於てなし、徒らなる空想と虚妄の時間を持つなさいふのである。目的は窮極に於て一にしてその責任は二重にある。達成には次第順序がある。一步一步進み一段一段と高く、その日々の完全を期せよ。學課を輕蔑するな、根を張る時代は土の軟きにのみ踰せず、岩をも穿たねは他日に生きられぬ。困苦を避けな。自己を知り、時代を知り、自らを教へよ。特に再び來ぬ中學時代とその意義を知れ。眞にわかるに到つて眞に正しく生きられる。ロダンは「理解するといふことは死を免るゝといふ事だ。」と言つてゐる。「將來どうなるか」といふことは現在の自らの姿に語られてゐる。國家と個人との地位と將來とに眞の自覺ある諸君の眞剣な今日の努力を希求し、且之が成功を信じてゐる。

再び來ぬ中學時代。再び來ぬ中學時代。この語を牢記して、諸君は逸早く自己を確立せよ。一生の心性を啓培し、終世の運命を左右する生活の根を張る時、この意義の自覺と反省とは、諸君に次の發展を約束してゐる。苦勞が苦勞に終るものなら、私は諸君に之をすゝめはせぬ。再び來ぬ中學時代——と胸に手を措いて三思して欲しい。眞に中學時代の意義がわかれば、諸君の業は既に半成つたと言へる。



研 究

やもりの外部形態に就いて

五年 竹 林 博

一、一般形質

体は細長くして全面は鱗を以て覆はれ、背面は暗灰色、腹面は概して灰色である。下顎の下面は稍白く、又背面に於ては背柱の眞上にあたつて縞を見る。この縞は尾部に至つて著しくなる。体の全表面に粒状の感覺器が出てゐる。但し之は胸部の腹面に於ては少い。胸部に前肢、後肢が各一對づつ着いてゐる。頸は甚だ短かくして太い。頭部、胸部、尾部、四肢に分ける。

二、頭 部

少々扁くして畧々三角形をなしてゐる。鱗は粒状で敷石の如く並んで居る。

A、外鼻孔

上顎の前端近くの一対の小孔がそれである。これは側面からは見えない。

B、眼

横側に在つて大きく、眼瞼及び瞬膜を具へてゐる。

C、耳 孔

上下兩顎の連合してゐる後方約七程の處に開口してゐる。容易に見付けることが出来る。

D、口

頭部の前縁を廻つて廣き横裂状となつて開口してゐる。

三、胸 部

太き頸によつて頭部と連なり、前肢は後部に着いてゐる。

肛 門

尾部との境に小さく開口してゐる。前後が膨れてゐる爲に一見しては見付けることが出来ない。

四、尾 部

体長の約五分の二の長さを占め、前部肛門近くの一部を除く、外は細長く、肛門附近の一部は稍々圓く膨れてゐる。之の處の兩側に突起がある。

五、四 肢

前肢、後肢各一對づつあつて、兩方とも小鱗を以て覆はれ各肢の趾は扁平で、其の下面には小板列を有する吸盤があつて外物に容易に附着することか出来る。故に能く牆壁に攀緣し、或は倒に天井面を匍匐する。

「附記」

A、尾の再生

やもりの尾は大變切れ易い、これは一種のやもりの護身法である。然しこれは二三ヶ月、若しくは數ヶ月すれば再生する。但し冬眠してゐる間は容易に再生しない。

B、寄生虫(赤だに)

体の外面、主として腹側及び指趾の間などに寄生してをり、赤く粒狀に見える。

長曾根邊の生物

三年 狩 野 武

「長曾根橋」より西へ五十米、琵琶湖に入り込む、以前彦根

は口で奥の方が食道となつて居る。体内に二個星形の收縮胞があつて排泄作用を營む。又注意して探ると「太陽蟲」が居る。体は空胞に富み畧々球形で体の中心の核より眞直に多數の偽足を太陽の光線の如く放射線狀に出して居る。

又採集した水底の藻や木を注意して見ると「ヒドラ」が見られる。「ヒドラ」は体の形は圓筒形で、一端は他物に附着し一端は通常觸手を環狀に六本出し食物を求め、体壁及び觸手はいちじりしく收縮性で收縮すれば一耗程になり伸びた時「一種」二種で繁殖は有性的並に無性的(芽出法)により繁殖する。又「ヒドラ」の体を鉄で横断して二つにすると各が三日間位で完全な一匹づつとなる。

又藻類などに白い直徑一程程の一見綿の様な物が附いて居る。此れを十數倍の解剖顯微鏡で見ると、數十の「テマリクルラムシ」の集團である。体は後方に尖つた圓錐形で多數集り、各体の最後部を一箇の膠質塊の中に埋め集團を作り、頭盤を回轉させながら浮遊し外敵が來ると体を收縮せしめて小さくなる。一匹の「テマリクルラムシ」は体の後側に數箇の卵を有す。これから生れた「テマリクルラムシ」は集り新集團を作る。又「中」に赤色の細い「イトミミズ」が居る長さ約一種で体側に剛毛四束を有し頭を土中に入れ体を水中にゆらいて居る。金魚の飼料となる。

波止場と棧橋ミにかこまれた内側の水中に多くの「エビモ」

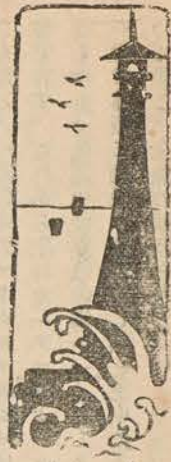
城外堀は土砂の爲堰止められ水溜を爲して居る。此の水溜の水を底より一抄しその一滴を顯微鏡下に持つて行けば、種々の動植物を見る事が出来る。

植物には「接藻類」の葉緑素を含んで綠色を呈し、接合子で繁殖する三日月形の「ミカヅキモ」鼓形の「ツヅミモ」及び各細胞に星形の葉緑体を二箇宛含む「ホシミドロ」が見え、又多數の細胞が一行に列り、各細胞には螺旋狀の數箇の葉緑体を持つ「アホミドロ」が見られる。「藍藻類」では、葉緑素と藍青素を含み、細胞が一行棒狀に連なる「ユレモ」珠數の如き「ジュズモ」針形の「ハリモ」等が澤山見られる。その他數々の硅藻が見られる。矩形、長方形、長楕圓形等種々のものが見えるが大多數は、大小二箇の箱形の殻を具へ、箱の身と蓋との様になり葉緑素と硅藻素とを含み殻には多量の硅藻を含む。

動物には「ミドリムシ」が見られる。「ミドリムシ」は原生動物鞭毛蟲類に屬し、葉緑素を含み綠色を呈し紡錘形で先端に一本の緑毛を眞直に出し、その先端をうちふつて遊ぶ。注意して見るに緑毛の根本に一本の赤い眼点がある。こねは光の明暗とその方向を知る爲のものである。又「ザウリムシ」が見られる無色で体の前端が少しく細くなり長楕圓形で、前面一様に細くて短い纖毛で被はれて居る。これが運動の器管である。体の中間に稍斜めに中央に近づく凹溝がある。これ

が密生して居る。此の藻類を手にとつて見ると、藻全面に寒天狀半透明で薄綠色を呈す三耗一五耗程度の球狀のものが着いてゐる。手で握るとぬら／＼する。これは「粘球藻」の一種である。又波止場内側の柱、石、棧橋の柱等の表面に一面に淡水海綿が附着して居る。藻類と共生して居る爲綠色を呈して居るものもある。所々の大きな穴は出水孔、無数の小さい穴は入水孔である。秋から冬にかけて芽球を生じて冬を越す。

又長曾根沖を朝早く日の出前(夏ならば四時三十分―五時三十分頃)に水表面淺く目の極く細かな網を引くと無数のプランクトンが得られる。此の中九割までは「デアプトムス」中には面白い形のえびの幼虫も見られる。「デアプトムス」は長さ二耗前後無色透明で觸角を前後に盛んに動かして遊ぶさまは顯微鏡下の奇觀である。



文苑

山路

五年 林 秀 夫

風が出て来た、両側の木立はざわ／＼と黒く騒いでゐる。頭の上には眞黒な木の間に薄明るい空が切抜かれた様に覗いてゐる。先刻までは大分星が出てゐたが頂上の方から下りて来た雲にすつかり消されてもう一つも見えない。僕は杖を持ち直して懐中電燈を點した。一間許先がぼんやり明るくなる路は相變らず赤黒く泥濘つて白い石がごろ／＼してゐる。耳を澄まして木枝の揺れる音ばかりだ。人の來さうな氣配もしないので又一人とぼ／＼歩き出した。坂は急な上にうね／＼としつこく曲つてゐる。眞直な路なら坂が急でも割に樂だがかう曲つた路はやり切れぬ。曲り角を下手に歩いたら直ぐ滑つて轉んでしまひさうだ、両側の木立は相變らず人を壓迫するやうに聳えてゐる。その黒い茂みの中には何かが潜

んで居さうだ。全く、山の中に自分一人で居る云ふ感じであるその一人なるが故に氣味の悪い事も悪いが又一種の誇と愉快さがある。山は多人數で登るのも面白いが、一人で登るのもよいものだ。山の神聖さは多人數で登つては矢張分らない。行者や山伏が山を精神修養の道場としたのは成程だ。克己心物に動ぜざる心を養ふには登山に限る、等考へて來た時何處か遠くで「ミーン」云ふ鈍い音がした。「雷かしら」と思ふと二三日前の物凄しい雷雨を思ひ出して一寸足がすくむ思ひがした。「大砲の實彈射撃かも知れない」と思つたが山中の雷の恐しさを考へるに自然に足が早まる。精神修養も山の神聖も糞もない。一刻も早く一合目の小屋に着くべきである段々息苦しくなつて來た。此の木立が盡きたら一合目なのでが行手には矢張木が眞黒に茂つてゐる丈だ。汗はぎん／＼流れる、足は次第に重くなつて來た。例の音は又聞える。此の角を曲がたらもう一合目へ出るだらう。次の角を曲がたら木立が無くなるだらうと思つて足を急がすのだが道を間違

へたのかと思ふ位木立は盡きない、やつと路が幾分平になつて來たと思ふに木がまばらになり、今までの森林特有の濕つた苦臭い臭の變りに清々しい藥草の香がすつと流れて來る。やつと一合目だ。ほつとして足をゆるめた。突然左の方に明るい大きな光が見え出した。茶屋だ、又足が早くなつて來た。もう此處ら邊は殆んど木がない。

茶店には五十位の男が一人つくねんと腰を下して居る。僕を見ると「お早うおすな」の聲をかけた、早い筈だまだ十時にならない。僕も「今晚は」と云つたが、餘り疲れてゐる爲蚊の鳴くやうな聲しか出ない。自分ながら可笑しくなつた。荷物も杖も放り出して腰を下すと暫くはぼんやりして汗を拭くの忘れてゐた。「お一人さすか」と云はれてはつとして、「え」と答へたが後を續ける氣にもならぬ程体がくたくだ。麓の方に村々の灯がまばらに光つてゐる。右の方には長濱の町の灯がこちや／＼かたまつてゐる。琵琶湖も何處に在るか分らない。近江の天地は氣味悪く眞黒に静まりかへつてゐる。

月が出たのか空が少し明るい。亂雲云ふのであらうか。慌しい雲の去來である。西へ飛び去る雲、東へ向ふ雲、更にその間を別の雲が斜に流れる。伊吹の夜空には暗雲が渦巻いてゐる。風が草叢を、茶屋のとたん屋根をさ／＼と撫でて通り過ぎる。突然天地の底から湧き上つたやうな重苦しい汽車

の音が聞こえ出した。ブム、と云ふ機關車の響きが風に運ばれて來る。とその音も大に吸ひ取られたやうに聞えなくなつた。後は又大氣が呼吸する風の音許りである。ふと懐中電燈の電池が無くなりかけてゐたのに氣が附いた。「提灯がありませんか」と聞くに「へ？」とげげんな顔をしたが直ぐに「おへんな」と云ひながらのそ／＼と出て來た。人の良さうな赤銅色の圓い顔をした親爺だ。「今晚はちと荒れまつせはあきまへんわ、それにもう直き月が……」と云つて頂上の方を眺めた。雲がだんだんと山腹をはふやうに下りて來る。雲の去來が益々慌しい。「此の様子は今晚はちと荒れまつせ」と遠慮なく心細い事を云ふ。雲の上に月があるらしく山の形は大体ぼんやりと分つてゐる。一合目から上は木が殆んど無い。一面の草原の山の圓い尾根が怪物の背のやうに重り合つてゐる。夜目にも白々しい霧が五合目から上を隠してゐる。ふと先刻來た路の方から人聲がしたと思ふとさつと懐中電燈の光が流れて來た。七八人の青年團の團員らしいのがやつて來る。ほつと救はれたやうな氣がした、茶店の親爺はそれを見ると「電池が悪くなつたらあの連中について上りなはれ」と教へて呉れた。間もなく彼等はさ／＼やつて來た。三四人は茶店へ入つて來たが残りりはぎん／＼登つて行く。僕は知らん顔をしてその後から歩き出した。彼等は歌を唱つたり大聲でしゃべつたりしてぎん／＼早足で歩く。ともすれば遅

れさうだ。空は大分明るくなつたので僕は皆が三合目で休むと又一人で歩き出した。今までは天氣に無頓着だつたが矢張り一人になると横なぐりに吹きつける風が不安になる。長濱の町も大分下に見える。と地平線近くに小さな圓い星屑のかたまりのやうな物がぼつこ光つて消えたと思ふとぎんとうと云ふ例の音が聞えた。「ちえつ」花火だと思ふと急に氣も足も軽くなつた。のも束の間、目の前をすーと霧が流れ出した。町や村里の灯も急に掠れ出したと思ふと数が少くなり、遂に全く見えなくなつた。後を見るに三合目の茶屋も見えない。完全に自分一人が霧の中に捲き込まれた形だ。風も加はつて來た視野はそれでも數十間位利く、前後左右を見ても光は何もない。眞黒な夜半の山腹に自分一人だけが杖をこつこつ云はせて歩いてゐる。周囲は眞白な霧が渦巻いてゐる。何だか自分が英雄なやうな氣がする。然し風は愈々烈しくなり、霧は霖雨になつた。山一面に生ひ茂つてゐる笹や色々の草が風が吹く度にざーつと云ふ雨のやうな音をたてる。帽子の底から滴がぼつぼつ落ちるやうになつて來た。ズボンやゲートルももうしつとりと濕つてゐる。シャツは元々から汗でじつとりしてゐる。又一陣の涼風が露を含んで吹いて來た。襟のボタンをはづすさ寒い位だ。

霧が益々濃くなると共に坂も段々険しくなる。岩石の露出してゐる處は這はねば歩かれぬ。遂に視野は數間に狭められ

斯くして僅かな手兵を以てして、その何千何萬の兵力も及ばない巧妙量り知れぬ智謀策畧を縦横に廻らし、或は赤坂城に、或は金剛山に雲霞の如き大軍を壊滅せしめ、國史を一變せしめる建武の中興の大業は成就せられたのであつた。然し乍ら、足利氏背いて再び天下が亂れるや、又もや各地に轉戦し力戦して賊を破つたけれども、後、勢をより返して破竹の如く九州より攻め上つた足利の大軍に對しては、如何に勤王の志厚くとも衆寡敵せず、加ふるに獻策用ひられずして有名な櫻井驛袂別後遂に湊川に於て奮戦苦闘その甲斐なく、四十三歳を一期として壯烈鬼神も泣かしめる最後を遂げられたのであつた。

公が笠置の行在所に伺候した時は卅八歳であつたと傳へられる。それより湊川に於て戦死される迄僅かに數年。その間公は生死を顧みず、利慾を度外視して、只管に至誠純忠以て臣節を全うされた。他に雜念なく大君の爲に忠誠を勵む唯そればかりを念とされてゐたのである。その志の現はれる所、寡兵よく大敵を制し、就中千早城に於いては幾多勝れたる奇畧を思ふまゝに用ひ、或は大木大石を投じ、或は熱湯を浴せ、或は窺人形を用ひ、或は吊り堀を仕掛け、僅か千余名の兵を率ゐて八十萬の關東勢と戦つた如き、太平記中の興味津津たる場面。又赤坂城脱出の際に於けるが如く、巧みに戦死を装つて城を焼き拂ひ、敵の油斷を見て、疾風の如く金剛山

た。乏しい懐中電燈の光に路の兩側に茂つてゐる大きな笹や鬼あざみの新鮮な綠色を幽かに浮き出させてゐる。ふも大分下の方で人聲がしたやうだ。僕は立ち止まつて、耳を澄ましたがそれ切り何も聞えない。霧をすかして見たが何も見えない。立ち上つたついでに帽子を脱いで汗を拭いた。睫に小さな水粒がたまつてゐて、目が冷い。僕ははつと大きな息をつくと此の盡きさうも無い山路に又一步々々足を運び始めた。

嗚呼、大楠公

五年 安藤 權 一

悠久三千年の光輝ある我が國史の中に燦然と輝き出てゐる大忠臣こそ、四面朝敵の中に孤軍奮闘して萬世一系の天皇を擁護しまゐらせた楠木正成公その人である。

後醍醐帝の御召に依つて行在所に伺候した時奉答した「臣にして未だ死せずんば、賊の滅びざるを患ひ給はされ」との楠公の一言は何といふ自信に満ち溢れた而も熱烈なる勤王の精神の凝り固つた力強き言葉であらう。僅か河内一國を領する微々たる勢力を以て、殆ど天下に余る賊軍に對し敢然として義兵を擧げ、勤王の菊水の旗を翻したその意氣の壯たるや何者に比すべきであらうか。

に再擧を企てられたその沈着さ、敏活さ實に楠公は豪勇の面に水の如き冷靜さを、加へた深遠なる智謀に依り攻むべき時には攻め、退く時には退き、着々として遊賊を平定されたので而も終始一誠意湊川に於けるその悲しくも、勇ましき最期楠公薨せられてこゝに六百年。湊川戦死の時残された「七度人間に生れて朝敵を亡ぼさん」との七生報國の精神は、今も尙盡きず、六百年後の今日日本國民の血管に脈々として流れてのである。今や邦家の非常時に直面し、内憂外患交く致の重大なる秋、而して方に日本精神が發揚され、皇道精神が發揮されてゐる折柄、恰も楠公六百年祭を迎へたことは何たる意義深きことであらう。稍もすれば忘れられようとしむた國民精神が作興され、且つ國民齊しく目覺めて、躍進日本この明日の發展に力強き足並を揃へてゐるのは、實に遠き楠公の英靈の此際に國民の誓ふべきところを御指示にされたものと信じる。

嗚呼偉大なる至誠純忠の英傑大楠公―輝く國民の儀表で。楠公こそ崇高なる日本精神の結晶である。私は楠公を最も敬慕して且つ感激感謝してゐる。私だけでない全日本人としてあの皇居の前にある颯爽たる馬上の楠公銅像を仰ぎ見ては誰一人その雄姿の貴さに打たれぬ者があらう。未來永劫天地と共に亡びない國體は同時に大楠公の名を益々不滅の輝きを以ての典型龜鑑として、永遠に傳へるであらう。

秋に想ふ

五年光 友 正

夏も終り、秋も立ち初めた此頃では、葉蔭によつて鳴く虫の聲も聞かれるやうになつた。秋の氣配が、一段と風に含まれて來た感じが強い。明け放つた二階の窓から、見はらす空の彼方に廣々とした沙漠を思はせる蜿蜒たる山々が、紫色に霞んで見える。渡り鳥が歸る用意をして、高い電柱の上に電線に幾干とも知れず勢揃ひして、遙か南の空を見つめ、一齊に歡喜と別離の言葉を残して、山を越え海を渡つて飛んで行くのも此頃である。私は、度々南國に旅する人々からよくこの幾干とも知れない渡り鳥の群が、海を掩ふ様に飛去つて行くのを見たといふのを聞かされる。さうだ、彼等が海に出る頃には日本中の渡り鳥が集まつてゐるに違ひ無い。私はその有様を一目でよい見たいと思ふ。

秋だ!! 秋だ!! 人生を眞に考へさせられる此の季節、そして自己の立場を明瞭に見せつけられる今日此頃、尤ものん氣に放浪を續けることが出来なくなつた。人間は來るべき冬のことを考へる。木々は一樣に枯葉、紅葉を見せるポプラの黄色い葉の波が道に生れる。

空を見よ、空を見よ、其の何處迄も澄んだ廣々とした感じと鋭さ、白雲は、夏の夜の夢を乗せて、過去へへくと歸つて

理性を失はない、愛情本能をよく制御する眞正さ。生くることのわびしさ、生くることの強さ尊さ、秋はそれらの全て

エンゼンの響きをたてて、秋空に飛行機が姿を現はす。太陽の光は次第に其の白さを増す。秋は朝に夕に海に陸にしみじみと自然と人生の眞の姿を眞のいとなみを語る。

受験場の雰圍氣

五年 林 榮 一

今日は試験の第一日。九時迄に一時間程あるが大阪商大の校庭は既に受験生と附添人の洪水だ。新しいグラウンドの圍りを歩いて見たり、校門の前でくれた、歐文社だとか、〇〇豫備校とかのパンフレットを讀んだりして九時を待つ。時間の來るのが待ち遠しい様な、又恐ろしい様でもある。あちらの日當りのよい所で市内のK中、I中の連中が澤山群つてゐる。正に五層にとつて敵視すべきものである。夏服が一人目につく、臺灣かなと思つて見る。浪人も相當に居るが、五年生が一番多い。自分と同じ四年生も二割程は居る。割に朗かなのは四年生だ、受験もせぬ前から來年の受験校の話をしてゐる奴がある。

鐘が鳴る。入場の鐘だ。そろ／＼と入る。急がうとし

行く。それを見る時、人は過去より未來に生きる。全ての生活が眞に始められる時無駄の無い生活、私は此の季節に、理性を失つた者を考へたくない。地上を歩む一歩々々が明らかに過去への印を残して行く様に感じる。クリスチャンはこゝに於て神の尊さを知り歸依をふかめ、詩人は冥想に耽つて、詩のリズムを味ふ。ルンペンにも人生の秋はふかい。何時まで其の生活が續くのか、彼等は來るべき冬を恐れる意味に於て秋を知る。全ての人が、全てのものが、自らの眞に返る時が秋だ。其處には、春の様な陽氣さも無い。夏の様な元氣も無い。云つて冬の様な陰鬱さも無い。全てを調和した季節の横顔が、風に、空に、虫に窺はれる。

隣家では、ヘチマが二尺にも伸びて、黄色い花を見せて居る。枯れた竹稈に蔓が巻きついて居る。雀は相變らず賑やかだ。彼等の前には季節といふものが無い様だ。

空は、青くして廣い。それに微風すら無い。川面は張り切つて、浮標が一つ、忘れられた様に浮んで居る。日は暖かく川邊の小草からは、はら／＼と陽炎がたつてゐる。釣をしてゐる老人は、一心に其の浮標を見つめてゐる。と思ひ出した様に浮標が、たゞそれのみが、小さい波紋を見せて上下するはげしい秋の中にもこまかい愛情がある。特に小春日和に感じる。

私は、秋に生れた愛情を喜ぶ。そして其の永久性を思ふ。

たつて一杯なんだから。やつと十三號室に入る、同じ彦中の〇君は十四號室だ。受験票を机の上に置いて、ビンで机に押しつけられてゐる自分の寫眞と睨み合つてゐる中に第二の豫鈴が鳴る。監督の先生の入つて來る時間だ。二人入つて來られた、一人は中老で、一人は若い人だ。丸く巻いてある試験用紙をほさいて、各人の机の上に裏向に配はられる。然し本鈴の鳴る迄は手を觸れられない。其の間中、眼を閉ぢて腹式呼吸でもやつてゐる。先生の靴音だけがコツコツ響く。所謂嵐の前の静けさか……、實際一人として味方はないのだ、激しい頭腦の戦が瞬時の後に開かれるのだから。いよ／＼だ。本鈴が廊下の隅々に迄響き渡つた。サツミ答案用紙を表にして、五問題をナイフによつて切り離す。第號を書いた。さあ問題にぶつつかののだ。サラサラさいふペンの走る音。パチ／＼と、スチームの通ふ音が殊に大きい。かくて二時間頑張つて、答案を封筒に入れ、ビンで机に止めて、退場する。

三階から階段を飛ばやうにして一階の見える最後の階段の上に来て見る。下から心配相な附添人の顔が階上を見上げてゐる。はつと思つて靜かに下りて行くと、本校の學生らしい人が、僕の帽子を見てゐたが「君! 彦中ぢやありませんか。」と聲を掛けてくれた。中村といふ人で彦中の先輩だ。佐藤先生に教はつた、と言つて居られる。膳中の先輩で同校生の人達と縣人会から來て下さつたのだ。〇君もやがて下りて來た

し、膳中生も下りて来た。一先づ別れて晝食をとり、晝食後中村さんから國史の出題振りについて話してもらつた。本當に先輩の方々の盡力して下さる事は、大變に頼しくなる、大きな味方が出来た事は、此の様な場合は殊にぎんなに力強く感じる事か。

學科試験は三日間有り、今日は身体検査と人物考査だ。

身体検査は願書と同時に送つて置いた検査書を確める程度のものであつた。次いで人物考査だ、之には豫め必要な事を筆答によつて提出せしめられる。試験場の廊下に二十人程順番を待つ。いよく自分の番だ、チリンと室内で合圖の鈴が鳴る。戸を静かに明けて、一禮し、三人の先生の前に進む。中央の先生の机の上に受験票を置き、椅子に掛ける。中央の先生は寫真で首實驗してから、先づ家庭の事を聞かれる。此の先生は大變穩かに問はれる。矢張年をとつて居られるからかとも思ふ。次に右の先生は内申書を見てから中學の成績について聞かれる、内申書にはさうの様に書いてあるか本人は少しも知らないのだが。此の先生は話し方が少し穩かでない。次に又中央の先生が學資について何度も念を押す様に聞かれる、之が一番重要であるらしい。それから三人の先生は小聲で、「よろしいですな」を相談して、「よろしい」。此處で又受験票を手にして、一禮の後退場する。出口で又一禮して顔を上げると、先生達は此方の動作をじつと見て居られる。チリ

ンと鈴が鳴つた、次の者が入つて行つた。此の間約二分間であつた。二分間で人物の考査が出来たのだらうか。試験はこれで全く終了した。後は發表を待つばかりだ。何だか氣がかりな心である。

自ら生きる草

五年 林 義 夫

山は若葉！春が深くなつたのだ。灰色の地肌の上にも緑の銀光が滴つて居る。零下の冬から脱出した村人も、木も、草も今は一齊に春の太陽の恵みを受けて、始めて大きな深呼吸を思ひ出した。桑の芽が徐々に其の可憐な頭を擡げ始め居る。

四月中旬の或る日、私は早朝に散歩して居た。それは晩霜が降りて桑の芽が黒く變色してカラ／＼になつて居た朝だつた。それを見る百姓の顔は萎んで居た……

外氣は全く冷めたかつた。ふと私は石垣の間から伸びてゐる軟い草の葉に目を引かれた。霜をかぶつた其の草の葉は、こゝぞ！と力一杯緊張して居るかの様に見えた。私は何を感じたか……私は其の草の葉の上にそつと人知れず愛撫の手をさし伸べてやりたい衝動にかられた。自分一人で漸く陽の恵

るれ「ほんたうだつたよ！ あの時……」。

思出が菌類の繁殖する様に増して来る。僕もT君に答へて色々語り合つた。その言葉は親しみ合つた彼の心に浸み込んでいざらしく、友の瞳は輝き如何にも嬉しさうだつた。

「まあ元氣で行つて来るよ。」

達者でゐて呉れよ。

便りを澤山呉れよ。

故郷のニュースもさつさり！。ラスト五分の際に色々真剣になつて注文して呉れる友の顔をちらつと見たとき「惜別——僕はも早や何一つ語れず、たゞ下向いて首肯してゐるのみだつた。

何知らず直江津行の列車は轟々物凄く入つて来た。

「ではさよなら。」 「元氣でねえ」

沈澱して行く騒音の中に握手し合ふ温い彼の手……。離苦を否定し切れない、彼の眼は涙で満たされ、そしてブラットのステーションネエムの電燈に輝かされてゐた。

汽笛一聲！彼は早や車窓の人となつた。彼が車窓より振つて呉れる眞白なハンケチも、夕暗が迫つて早く消えて行く。僕も一生懸命に白線帽を振りつゝ、丁度汽車が森の中へ消え去る迄見送つた。もう汽車は見えない。たゞ汽車が吐き出した一すじの煙のみが薄暗い秋空にいつ迄もさまようてゐた。外へ出る。待合所には乗客も少く、皆一様に黙つてひっそりこ

みを嗅ぎつけて這ひ出した其の葉、そしてまた冬がやつて来る。自分一人で、無言のまま、其のつめたい石垣の下に淋しく消えて行く其の草の葉、私は其の草の葉に限りない懐しみを感じた。石の下から自分で育つお前は強い！。生あるものゝ總べてが有つてゐる生きる意志の強剛さ。大地を割つて、根力入れて、ひこへに上へ／＼と強く伸出でようとする自ら生きる力に限りのない愛着を覺えた。

生きんとする生命に春日は輝く。特に自らの力によつて生きんとするものゝ上に懐しい太陽の光である。

さらば友よ

五年 大橋 文 吉

丁度黄昏時だつた。

別れる友と二人でさびしく野道を停車場へと急いだ。眞赤な秋の夕暮れが迫つて来て、狭い野道の兩側に實を結ぶ稻穂は重たげに垂れ、恰も友に別れを告げてゐる様に見える、時々野原を横切る涼しい夜風が黄金の波を湧き立たせてゐる。

停車場に着いた。窓を開け放しにしてある待合所には、四人の客が時間表を見てゐた。

友T君はトランクの側に腰かけて底知れぬ一種の哀愁を強ひて否定して、元氣よく次から次へとつかしい話をして呉

してゐた。

僕は彼の空想を心に静かに描きつゝ、森と連続してゐる白い隔離病舎の側を通りぬけて、我が家へと急いだ。その時僕は何だか急にさびしくなり二年生の時學んだッ友の別れッを歌ひつゝ歩を早やめた。

かたみに腕を取りかはして

名残りは盡きぬこの別れ

まごころこめてあひ睦みし

いさしき友は去り行くか。

星が三つ四つ輝き始めた。さみしく秋の虫がなく。あゝ親しい友はもうゐない。

田園を讚美する

五年 中堀 正 男

平和な空氣の漲る田園に土の香に親しんで働く、それはさんな幸福な事であらう。華やかな都會、美しい都、それは若い希望に燃ゆる者の如何にも憧憬るゝ所である。そして都に憧れた青年子女が成功とか、榮耀とか、さうした事をたゞ漠然と何の艱難辛苦もせず、大した努力もせずに、たゞ都會へ出れば自己の慾望が容易に成就するものと考へ、生きる競争

の烈しい混沌たる今日の都市に……。その闘争との激しい渦巻の中に、盲目的に、都會戀しの淺い希望に打乗せられて母の國の田園を去つて行く。然し今日の都會に於て、人々が想像した程に凡ての望が容易にかなふものだらうか、希望、理想、それは自己の想像が大きければ大きい程都會に出て其の期待を裏切られるかもしれぬ。そして都會は住みにくい、骨が折れる所だと感じた時には既に遅い、或ひは病魔に貴い身體を犯されたり、或ひは誘惑の毒手にかゝつて傷いた心を胸中に秘めて有爲なる青年子女が斃れおちぶれて再び故山の土を踏むにいたる。都會に於て恵まれた人々が、音樂會に、觀劇に競馬にゴルフにと日夜を美と娛樂とにすごすのと、汗にまみれて身体眞黒になり、朝、東天の曉の雲を分けてさし登る太陽を拜しつゝ、清らかな空氣を胸一杯に吸ひながら、夕空の銀星がまたくまで孜々として自然を友として土を耕し働く人々とどちらが貴いだらうか。

前者は人工的享樂であり、後者は元氣潑刺たる自然美と健康の世界である。

身は金殿玉樓に住み、山海の珍味を食べて榮華に生活してゐると思ふのは表面的である。心の中にはげしい大きな悩み又苦しみもあらう。例へば伏屋に住ひして、不味い物を食べて居ても年に一二回のお祭や、お祭の團子に舌鼓を打つ事都會人の日常の刺身の味：洋食の味以上である。まして都市

の人のすべてが豊かに美食してゐるのではないのだ。音樂とか、觀劇とか、慰安に接する場合が比較的少くとも、自然界に咲き笑ふ美しき花、山野に飛び囀る優しき可憐な小鳥の歌の方が働く時にも、遊ぶ時にも、勉學にいそむ時にも我等の友達と成つて充分慰め、樂ませてくれるではないか。素朴な、正直な、のび／＼した田園が働く者には却つて幸福ではないか。都會生活よりも、田園生活は、我等青年の身体を健康となし精神を強壯にする。私は衷心から田園を讚美したる。

偶 感

五年 中村 音次郎

小野道風は蛙が柳に跳んでは落ち、落ちては復跳ぶ忍耐力に感じて、遂に自己の業を完成した。學者須くこの蛙の如く目的を達成するまでは再三再四の失敗に屈するこゝなく、飽迄己が業に熱意をもつて撓むこと勿れといふ。

しかし自分等はこれを淺薄に表面の文字上よりのみ解釋してはならない。字句に言ふ如く跳んでは落ち、落ちては復同位置より跳ぶのを繰返す。それでは得るものは疲勞と絶望が忍耐力を除々に侵襲して行くのを感じるのみだらう。跳んで

落ち、落ちて跳ぶ單なる動作の反復では少くとも柳に跳び付くは不可能であらう。

跳んで落ちる。落ちたらその都度今の缺點難點を省みて次の新しい飛躍にかゝる。斯うした場所を變へ方法を改めて飛んでこそ、終に目的の柳にさびつき得るのであらう」と自分は少くともかう考へる。

新聞片手に寝轉ろびながら考へた。時の流れは速い。『時は人を待たず。』『光陰矢の如し。』『隙行く駒の足はやむ』又『時は金なり。』も反面より考へれば時の速く過ぎるの言つてゐるのだらう。『年』は速い。『時』は人を待たぬ。疾く行く——『疾し』——即ち『年』なり。『疾き』——即ち『時』なりと。

『書は以て姓名を記せば足る。』

これは項羽の言葉である。この言葉から自分等は殆ど反射的に項羽が字に不達者な有様を想像する。併し事實は寧ろ之に反對であつたといふ。即ち彼は一流の達筆家であつた。

この言説の眞否はしばらく論じないとして、書に達者なる項羽にして始めてかゝる言葉を言ひ得るものだらう。何事も淺薄には考へられぬと思ふ。

修學旅行隨筆

四年 奥居 重勝

出 發

ツラリとブラットフォームに並んだ嬉しさにはち切れんばかりの顔、顔、顔！

やがて轟然とすべり込んで来た汽車に、いち早く飛び乗つた百餘人の我等は五時五十一分一週間に亘る修學旅行の第一歩を力強く踏み出した……

七時十七分、夜の京都に着く。都會の空氣が我等のはり切つた頭をいやが上にも興奮させて呉れた。乗り換へして、八時三十分京都を發す。愈々夜汽車だ。汽車は眞暗い夜の中を暴進する、時々車窓をかすめる灯、野を、山を、關の東海道を一路西へ西へ進み去る。ゴトン／＼と云ふ毎に紫の煙がゆらいで、いよ／＼夜汽車の氣分を濃厚にする。大阪に着いた。嘔き合ふ様に夜の空に明滅するネオンサインがなつかしい。神戸に近づく頃、はるか右手に六甲の灯がちら／＼と眼に入つた。いよ／＼山陽線に移る。車中のにぎやかなこと、隨所に起るほらかな爆笑！湧き返る歡聲！渦巻くさよめき！うれしい旅の第一夜は、かくて更け行つた……

嚴 島

る、門司に着いた。又汽車に乗るのだ。汽車の窓から顔を出して、もう一度見返へして見たら、ボンヤリさつき洋館が見えた。やつぱりクリーム色だつた……

阿 蘇 踏 破

坊中驛について輕装して愈々登山の途に着く。

初の間は散歩道を行く氣持で、我々の元氣は愈々そゞられ、勇氣百倍登つて行つた。幾重にも重り合つて灰色の山裾を取巻いて居る青草の丘の魅惑的な曲線。思はず故郷の伊吹山を思ひ出さずには居られなかつた。又その青草の丘の頂きに一軒づゝ立つ居る茶店と日の丸の旗。茶店と茶店とをつないで青い丘のはだえにくつきりと盡き出されたオレンジ色の登山道。それ等を全部足の下に、青い大空にぬつと無言の中に靜かに憩ふが如くに聳えて居る巨大な灰色の火口丘！

道は次第に急になつて來、おまけに樹も草もない熔岩の道となつた。登るに従つて疲れる、退屈する、實際へたばりさうになつた。が、ひとたび噴火口上に立つた時一瞬疲も何も忘れて、若々しい歡喜が胸にわく／＼と込み上げて來た。すべての物をうち忘れて火口を覗き込んだその瞬間！おゝ其の瞬間 あゝ!! 直下幾十丈！天に沖する濛々たる白煙と地軸をもひしげんばかりに轟々と響く音響と共に、噴き上げられたる赤熱せる熔岩！ 覗き見る身は、目眩み氣も奮はれん

宮島より連絡線に乗り、日本三景の一と稱せられる嚴島の大鳥居を、朝もやの中に見て下船し嚴島神社に参拜した。長い廻廊を神前毎に拍手を打つ敬虔な一老翁の説明を聞きながら詣でる。境内を彷徨ふ神鹿の群に無限の親しみを覺えた。小波のヒタ／＼と押し寄せる海邊を歩く、靜かな波一つない海上をボン／＼蒸氣が軽い音をたて、進んで行く。連絡船が黒い煙を長くたなびかせて、靜かな海上にその美しい姿をうつしながらすべつて行つた。思はず故郷の琵琶湖が思ひ出されてなつかしかつた。やがて同島を辭して、うすれ行く朱の大鳥居に來るべき日の再會を約して別れを告げ、又船で宮島に返つた。

關門連絡船

愈々下關に着く、乗客の居ないことによつて、始めて本土の最端下關に來たと思識する。はき出されたやうな降客の波に乗つて、すぐ近くの連絡船に乗り込み上甲板に出ると目指す九州の連山は、直ぐ目前にそびえ門司の港は灰色に煙つて居る。ザザーザザーと船に碎ける波のざわめき。それが軽いリズムになつて、あの『ドナウの漣』の軽いワルツを我々の心に奏す。船は夕風の海上に白玉を飛散させながら種々様々の船舶のしきりに行き來する間を縫つて行く。門司も、下關も灰色にうすばけて居る。たくさんの船の煙突やマストが一ぱいに立ち並んで居る後ろにクリーム色の洋館が立つて居許り。一瞬又一瞬、秒又秒その状態が變化白出する、雄大な壯の數語を連ねたりとて、到底その實狀が言ひ表はせようか？……阿蘇よ、火口よ、永遠に噴火を續けよ！と心の中で絶叫して、名残り惜しい心で引かれながら下山の途に着いた。愉快だつた。少しの間とは云へあまりにも雄渾な、壯大な男性的な轟々渦巻く噴煙の大阿蘇の懷に抱かれて來たと思ふと實に愉快だつた。たん／＼とあの物凄かつた噴煙も遙か後になり、地軸をもゆるがさん許りの地鳴りも今は遠い遠雷の様になつてしまつた。汗とほこりにまみれて、血を吐く思ひで登つて來たこの道がなつかしかつた。なんだか感慨無量になつてしまつた。足下の坊中の町をもうすぐ下になつた……

九州よ、さやうなら

別府の地獄めぐりを終へて、これで旅行のすべてのブログラムもすんだ。

なんだか淋しい満たされない氣持で別府港に集り、やがて棧橋に横付けされて居る『みさき丸』に乗り込んだ。多くの船客も乗船した。これでお別れなのだ。かう思ふこの旅行を終ることが、何だか淋しくなつて來た。出船も間近くなつた。埠頭は見送りの人で一杯だつた。見送る人と船出する人達との間に色とり／＼の五色のテープが幾筋も幾筋も張られた。テープは夕日に淡く映えて何處からともなく吹い